

百
萬
行
公

九大将家六百番歌合卷中一目録



御歌

春

元月宴

賭村

遊線

三月三日

終老

雲水

若草

野遊

雜

雲雀

春暎

逢日

志賀山越

蝶

沙雲

伯耆

左

女房

後京極

後三位藤原朝臣季經

正四位下右近衛權中將藤原朝臣道宗

從四位上右京朝臣季家

從四位下右近衛權少將右近衛朝臣定家

阿闍梨教船

式部卿左大臣藤原公季

右

從三位右近衛權中將中宮權大夫藤原

朝臣定家

從三位藤原朝臣經家

正四位下右京權大夫右近衛朝臣隆信

從四位上右京朝臣家隆

從四位下源朝臣信通

孫

権師

判者

讀師

判者

判者

判者

判者

判者

判者

大將家六百番秋合巻中一

春

一番 元日宴

左 持

女房

あつ玉のうらとむ井小びりふもきふ詠人みみき流ふりり

右

信宅

りくくもや春張びりふ流並よちのらとせのけそうつれ

心方中一云左身一筆持取を

一左中一云心身一筆持取のあくらたりのなりを御業とこそ

判者

判云左身一筆持取のあくらたりのなりを御業とこそ

判者

討りしゆらんむまハ葉の心をまより一左方ヤ一とるさも
あふ事なれや又葉の舞一とそも那とらなりのらん祝お
まことしゆり指しし

二番

左

季経郷

左へく年の長しハとふんさのさねとれまふひるもこの夜

右 勝

津森つ

松のさ兒娘ぬお室よまらまのあ世の辰海とらふなてける

左方ヤ一云左舞一葉かじうこひひ一法白びゆりす

左方ヤ一云叶一めれ又字母一うとてまこ也

判云左題ひし海とふおひひなくは連とひるりこのまぬ

あく流ゆるぬゆもすえいなるや志の元日氷のたゆ

と幾すのり一と葉の心を待りめと云乃おもてゆへ
お室れ舞一とや受ゆらん一と一おひるりこまろし
かろとまあしゆり氷室りらまをゆらん

三番

左 勝

五家朝臣

初春のさふも受て見しこのりれくふとみむのさる一とそを

右

歌邊

と路人乃ちらのれ庭れあつはさる一とそもさる一とあ代の初ま

左方ヤ一云左舞一を指歌

左方ヤ一云左舞一を指歌

判云左舞一のくしとあ代乃ちる一とそとくといるるむよ

ろくくゆへし左舞もむくこを優る一ゆれと盡ふまの

けりて極るやまらぬらん芝も所の清きのひとしくそ事
うりて物違ふは人の光もなかりあらん於以たの勝
曰番

左

定家朝臣

春くれも星れくくのち新みして芝井の甲ふせられたやめ

右 勝

隆信朝臣

いつりしと神とつらぬら百敷うり百代めくれ玉のさう清き

右ありえ左のうき心ゆるす

左ありえ右のうき心ゆるす

判云左新しとぬ心のぬらう左方人しとゆきゆるすは

糸を又巻ひぬゆる糸と右の方代めくれ玉の蓋とりん糸

下句よ詠しくさあえゆるたは勝よ詠了し

又書

左 極

歌 昭

正月五きふの海や井やとくしあ乃を此ののうりめならん

右

舞 蓬

百敷や神とつらぬら所の清きにえいとまむら玉の初のを

右ありえ正月五きふの海や井やとくしあ乃を此ののうりめならん

左ありえ陳云あのみ又文字系字集より出ると

右ありえ又中へ文豊のれをゆらなり

左ありえ陳云と詠くの前書巻のとし之由意余にみしると

左ありえ又中へ文豊のれをゆらなり

判云左新しとぬ心のぬらう左方人しとゆきゆるすは

糸を又巻ひぬゆる糸と右の方代めくれ玉の蓋とりん糸

やうふゆりよ〜百葉集よと出たりとも文合の町も
 ありなく證據とをへし〜も覚ゆるを方歌集を優行の
 事とらうつ〜文なりとをぬ人々や〜ゆ〜西邊坂集すよ
 くらげ〜もあやうゆぬ也又の集れ時まをらうたの病
 せきらそひ志のまはゆ〜も〜も文合の町を例とせ
 ぬり〜うぬぬこれそけ〜此事ゆ〜もあ〜すま〜て
 ち〜せきゆ也又とら〜のあ〜の里宮合ふ豊明を樂とかかり
 とそ〜しゆなを新〜乃風折よ〜とま〜うたぬゆ〜う〜こ
 乃這怨ひとゆ〜と計をぬふ〜う〜ハとさあ〜ゆ〜ゆと井も
 たりふなくを明もく〜ら〜り〜な〜う〜ゆ〜ハ讀む〜ひ
 てゆぬま〜も毎事〜う〜りふなきよゆ〜し〜た〜新〜を春乃
 初ゆせ〜とり〜人〜ぬ〜ら〜う〜よ〜を元日〜よ〜や〜と〜あ〜しゆ〜連と〜之い

とす〜びりな〜とり〜人〜ぬ〜氣〜又〜曲〜水〜此〜高〜抛〜花〜の〜そ〜城〜よ〜の〜歌
 やう〜う〜い〜花〜母〜聖〜ゆり〜も〜を〜ぬ〜を〜文〜乃〜折〜も〜優〜ゆ〜り〜も〜や〜を〜西〜海
 魚〜一〜丸〜乃〜海〜と〜ぬ〜も〜此〜か〜く〜け〜す〜ゆ〜ら〜も〜う〜い〜新〜ゆ〜り
 勝〜へ〜も〜ゆ〜ら〜ぬ〜も〜や〜指〜と〜ち〜へ〜を〜也

六番

左 勝

道宗朝臣

神〜り〜を〜ま〜み〜ら〜り〜乃〜ま〜を〜に〜年〜ゆ〜り〜て〜貴〜度〜春〜と〜ら〜を〜ふ〜び〜の〜へ〜川
 右
 い〜つ〜ら〜と〜む〜げ〜の〜う〜ら〜に〜高〜に〜余〜よ〜大〜文〜人〜や〜春〜と〜あ〜ら〜ら〜ん
 右方〜ち〜え〜た〜ま〜き〜し〜乃〜字〜耳〜ら〜り〜ら〜ら〜つ
 左方〜ち〜え〜た〜ま〜き〜し〜乃〜字〜耳〜ら〜り〜ら〜ら〜つ

中宮権大夫

たあ〜ち〜え〜た〜ま〜き〜し〜乃〜字〜耳〜ら〜り〜ら〜ら〜つ
 左方〜ち〜え〜た〜ま〜き〜し〜乃〜字〜耳〜ら〜り〜ら〜ら〜つ
 右方〜ち〜え〜た〜ま〜き〜し〜乃〜字〜耳〜ら〜り〜ら〜ら〜つ

判云元乃三叶一此きもの字又きくとうびへしとも覺覺
ききとゆりまつくなまとなしといゆる心優りううみとゆ
め連右又落書とりまも入られてゆりまもかたうふ
きみしゆまと元方人うこうひつゆめりゆのまおま
ゆまは元乃見りすあたらぬおれくやゆらん

七番 銘き

た 拍

季經つ

なとらゆら氣多うちうー山さくうまこみこゆる携うらん

右

中宮権大夫

志うふつまぬもを雪乃とく連ぬてまともいしをきし後らん
たあやー云元新し初又字も題これあつて連うる念は
左陳云うめれ又字小題の字とよむ事不可勝計

元方中一云心新し拍事

判云あのみ首を優りううみしゆまはゆりううみとゆ
新しうんれ解とくうう志まらあううされりゆえは曲打
微お風情と不尽之おお能跡之由被存やー之条不被耳心
事うーやうーし右新し雪のとく連ぬてなとらん
こくも今とあー思ふ包くやゆらんともきしゆまとま
よろしくゆまや勝負不分別

八番

左 拍

通宗朝臣

春きてまなとー氷る山甲そのむの氷れつれを

右

歌澄

まてても雪あつそくさけのむ連し霞もさゆるひらううすれ

左方中一云左新一志と氷きくよりくま
左中一云左乃うごを下ろし思へれおう

春判云左右の春きても成るし優よ備へし左乃志と右の詞右
お秘戸とろあ家へしとも覚悟くまを性凡詞左又霞も
八さゆなとみるる姿よろしきに似くろまやあの内し
又つれまきと中つりて

九番

左 勝

右 昭

志うきの外山を暮も清けし冬成乃くもや若れゆふの
右 経家つ
志同を吹とさけ世紫の座をなとさけし海よいより縁られ
志新中一云左新一志

左中一云左新一志

判云志うきのなとりんれより上句もあつてまを備
志若の夕風とくまきしうきよう物をいふすあもあゆ
らん物とをきく若の風とつふをうきけりま文字乃た
らて夕とそくて夕もやもとまを備みうあハ
若の志うけなとゆくをうきまや志乃紫れをささひ
てきまあし備とあのみさびーろをいとくま志あ
いるるやうし備う凡う備めれなとあまきすあ
さまさぬくくやゆらん

十番

左 勝

定家朝臣

志とあ人を控ゆる雪うしをとりて春をのあうれ煙火乃り

十二番

左 勝

女扇

おろけ子ももやうま風さして雪ありくもねん家の板れ月
右 深蓮

梅り枝のゆひもろりまやまからんを雪ゆのし窓れ列の

た右たりひる直之由と

判まあのあ首姿討せり優りかしくちる巻すくも依春

乃板れ月とつひふ残雪あり窓れ列のとらん歌せ

小つとれりくゆ也くくくを梅り枝のといるる枝

乃字けくもゆるぬんくやく打の梅りなとあかへの

里りるまや窓れ明りのもすてゆくらん板月巻巻とま

の板れ月なとまさおんきたようゆめれ

十三番

春が

左 勝

歌詠

吹りくのしけとわくあま風うはのひもとけちあらん

右

経家つ

雪津りるまねよま日やゆいほらん若れを川乃水まらうり

危右せりし歌詠之由と

判え右石の風折れはし料ちるとらんともたれま日なと不

可遊貴危すあしをゆさりゆらん

十四番

左 揚

定家朝臣

おのり水れちうるま互らん春の巻とる文池の柳もくれ

右

中宮権大夫

そこの海乃氷川への通路を今物ゆくせしむる邊路より
た方へ云云新し物より

た方へ云云新し物より

十のうへの邊路を新し物よりとくは極まり上三句を
遠之上に極之邊路又回

判云云乃云々波立取てふと帯たりのことなる事

さふれくしし物よりた方へ云云此乃極
より力出たの事と乃海川事た方へ云云此乃極

百首のうち此殊秀逸若軽と云云此乃極
た方へ云云

十八番

十右

栗種

をとりなりめさりの下の点水とあり

右・勝

隆信朝臣

きくかへり成乃成りいつくさつれり

た方へ云云新し物より

た方へ云云新し物より

判云云上句をいつくさつれり

る若様なりとた方へ云云

春乃故も嵐の中くなりて

驚ますさける心成魚

しりそきつれり

十六番

十右

道宗朝臣

春の櫻より池のおやとけわんまをさぬるも此花とさるる哉

十一の右

拜蓮

うくひを此候乃ほらけ群なうらたまをさるる所そ人志此山を

右方より云右舞を指経

花あやし云右乃舞をみこのつら群まう水此所をん

事あまより且まなくや

判云右家詞優くしゆあし心と涙乃お考れ群と唱て浮山を

式流り之条あり月さなるまや花をやすうふ優くし心と

風情とさうしをさうておとさ

十七の右

右

五家朝臣

山川よりおのくさひうらとけてるうさうさう水の白む

十六の右

勝

家澄

志保より云さけりなともおみして流るともなまうと氷うれ

右方より云右舞を指経

花あやし云右舞を指経

判云花あやしをさうくす也末を優なりと云まうさう流り

つらうらなまうらうしゆさうかまうしとさあし流りあり

心あうとおの志くふ波のうすれまけり心且まけりみゆ

右乃舞すあまをまさるるゆらん

十八番

右の指

女舞

木れるより日くけや志成りうす心松の志根乃水れし波

右

信定

春くれを物成らるる若う彼れををよそ行く皇山川の三山

尤右せ中一 五歌之由

判云あのみ首せみよろしくみし侍と尤本回よりとをり
下小松の志振とくみれをやそこの松乃本れ若まや又他
本せれ侍若れまやつれまをまのり病まや侍らんを
おを拂ふ若風乃なとつれれつてまたりく侍るを下句
流くくの詞や頗不被産貴侍らんを乃風流せによろしく
侍るを尤も本れ若あな侍らるく侍まや侍と尸へくや

十九番 ぬ草

左 拍

歌 昭

あまのれをふれく川物とつふして侍るれとび遊野人のぬ草

右

陸信朝臣

今朝み連と海の川のせり下根とけ縁小をゆり雪のひるき草

右方一云尤等一 詞花集一 俊直等一 云ぬおもくまはの

くもつうふ海をよまはふのぬ物もまされまりるを心
おろしあうんろふまはのぬ物もまされまりるを心

ろーたのやうりり

たあ一云右方とく歌まゆり同心病れまゆりも不被産貴

之詞りり

判云尤方を俊直は仰り等一 おね似るるろ一 右方一 云く

か様乃心をあつてま為此事一 也くし平貞文の等一

撥遣よくあまよろして春物乃此まひますろろ必まま

まくと祿せろまなれろをて思ままといん歌也まハハ

小繩ままといるるむ凡歌まや心を上句を俊也末句の

もゆる海にしによろいりつとを以て凡討勝負不分明也

廿番

右 ね

道宗朝臣

互つふおへ乃處を煙とてもて出るりりつ西連やわりくさ

右

中宮権大夫

もてけり野人のしりあまをこをせともあそあさみとわたり

右 ね 不優なりとれりやー之

判えあ首の人やーと願お而る勝負難弁やー

廿一番

右

栗徑つ

名よたてれむそのとり此下草もなわりーやをうて紫なりん

右 勝

信定

戦てさーこそれ松葉は海まをにうまともみしぬまれわのま

右 方やー云右弁勝六字きくみくを

九あやー云右弁勝六字きくみくを

判云むそのとり此下草年わーとやなとりん此秀句事

ありにさーこしこそれ松葉は海まをにうまともみしぬ

も心のわのまといるるつとれーくしう得めれ又字句

六七字を常の例やーのそ歌りー及うたの採方人構

勝句何句と構ーし其構勝句若何韻詩才三對句也和方し

構勝打事し中又字与下七字離別を以て謂也乞來侍る

得之謂也いふもくもなる勝

廿二番

右 持

互家おる

あまのくさくさの草葉やもよおし今物を書問乃浅みよりなり

右

家徳

花とのまらうらん人ら山家此ゆさまの草乃春と見せしや

花のまらうらん人ら山家此ゆさまの草乃春と見せしや

判云花新し野字まよ花新し山家此雪まのくさみくしや

らんむありてみもゆるさくし花のちのちの野と

ひかり花と花りし歌し仍不勝勝負

廿二番

花 勝

定家朝臣

とそくをれはのさぬくはを花もゆき二花れ春乃花葉

花

源家つ

笑くの花さくしとみしゆれまの野の野人の氣を

花右世同科之由答し之

判云あのみ首せよ花今葉乃緑ならゆき山家とそ春をみ

とよのらむなるしゆくまこれ勝勢をれまや

花のとさたらむ花の詞不被花葉まや

廿三番

花 持

女房

雪清ら花野の下れめさ思とりこそそのま葉や花より人れら

右

孫蓮

まぬを去年みし野人乃花うらも縁うらゆら花乃やけ魚

花のまらうらん人ら山家此ゆさまの草乃春と見せしや

判云花ころのま葉や花より花れらんとつひ花とらうら

つゝ花れれや花葉を優美しして勝負なり花へま

廿六番

賭射

左勝

女房

モトを我きまのりぬ前よりやふもこ乃きて即ちよき持号也

右

中宮権大夫

百教やりのさゆりまにあひさゆま我ひくころいよまをり

たあや一云右新子細とちうされ事也

たあや一云右新題之心中也

判云たあ又扱も所を心たりくみしゆり勝小約し

廿六番

左

多家朝臣

むのあつてのと持はれあしき罪玉く庭はともぬひくさ

右の勝

孫達

あひさ号ひやそとらうとそうそげんとむくぬ取をまれ上人

右方一云右新物句むゆられま

たあ一云右新雲の上人を彼くくれま

判云たあ上句偏ふく詞よみしゆりたうゆさり傳るめ

廿七番

左

道宗御旨

あひさ号ま乃雲のまひくくまをとよねよのよふ海との者也

右

源家卿

持号さうまの矢もやひうかたもてまをたあまあさむり

たあ一云右新世持秘

たあ一云右新平懐也

判云た新儲の雲言詞をよろこびたうされま可る左勝也

廿八番

左 勝

李經

百發よひつゝおれるあつさゆと春ととも祢よめつしと外
右 勝

と祢里らのくもうらなはと梓弓かく列わくふ春をさるたり

右方中一云九舞一也指歌

左方中一云九舞一也字はゆりす

判云右方又字祝水よ令入本必とや字をゆらん又以左勝

廿九番

左 持

梓弓并てひく春れりひあけてきふ乃と瑞矢をよふひと皇也

信定

あつさゆととも九舞ふらぬ雪をきふあつさゆの神よとる也

右方中一云九舞一也指歌

左方中一云九舞一也指歌

とりつゝ九舞れ春の舞たり弓あもりふらぬは月るつと

判云左右の梓弓ま乃りひとりの春九舞ふとゆるせにこと

まとして一と字をさるるや似て勝劣

卅番

左 勝

定家朝臣

百發やりてひく庭れあつさゆとひりふり人れ春よあつ

右

家定

あつさゆと春の雲并よひつと建てて氣安くとけりきふり人

右方中一云九舞一也指歌

左陳云毎年云々のも終りれも加極うりつふも常乃事也
尤方尸云云新しむ指報

判云左復旧儀之由なりし云又氣多しとなりたり人
何となく物儀を不のころし又指なりつふもや

一書 野遊

歌昭

家不摘あしとみれだりとの新もひそたも連あひきる

右

採蓮

わのふ此む子目りしや友なりハ家路思もぬ指報をりや
右方尸云云新しむ指報をりや
とらとらりとりむいるるさ此澄乃あ家路

陳云たるとりたあとり二極も新集にて川しらるるさ

て又掃海院百首し師町の云中もたるとりやよめり

尤方尸云云家路思もぬ指報をり必野計よりつふもや

右陳云子目りしやの事と思ひ出で野と思ひて後後しや

判云尤方尸もとりたあとりとらりたあも二極も尸

なりしとらりとりむいるるさ此澄乃あ家路

澄按るあ家つふと新集よりとらりとらりとらり

元は翁の季春月登集を望忽值貴義九ヶ女子百媚を傳花

寄る山略之と云里山事成りしん野遊乃新しむ指報をり

由法なきりあつとこれ魚しし方新集より二極り

黙とら田虎あ人なりとらら集を源吹り和を此故彼必付

来也送るし吹の點平干今新集たりたを以誰人之然可る
指南引師時以説以目前也何件翁再九女子為中しむ指報

とく詞をうらまや若れり定て黙とくへされりて二
例不しよび余をたけき善處之説也たりの八筆字了陽唐韻
あもたのひくと訓をり小野管以名字もたのひくと号し
てゆめり法をうらまのきてたあよろしきまやとくし
何うてもあの新し乃風流こと行り事するまよりたて
おもひくうなるとのんれが詞不可成身元志新しを法はれ
事なることとをみしゆ連をりつれも勝とと秘定中
例乃持よとゆめんり

二番

た 勝

李經つ

うらびまをすも連はむまふとふひは霞の内よきふもくしつ
中宮権大夫

善ゆらうりさぬらん春の燈は海とのをらふよりされへき非
右あや一云たを野遊のひそくしふゆり南時乃題のたて
拓りしをま建すあしとくや
元陳之聖極のひよふあふ時若乃事をあうまとらなぐや
たあや一云た新し雌期後日ことろしとくを録しふ聖極
乃ひきしあきれり
判云元新し極しろしきやうみみし持ちををみ連はむまふ
あもりんたまおの詞不可成身元右詞はひれりしうらん
とをみしゆとゆことろしゆ道と録しひてゆへし元下
むよろしとくは若てまされへきまや

三番

た 勝

五家物語

うらむ運てはれぬる人の心も思人此處もなてやそん
二番右 運家つ

梓弓春の目くくしひあつれてぬれさの思まきと并とそする
心方殊せやーと

尤方一云野遊とさー並て弓と御すくすー似らと又花月
う野野旅をきてりる所の原と思ひよられあんじりあー

判云心弁一尤方一う願を謂るれまや聖世の心とれりく
とくうう約めれいれさの思を梓弓すーひの運を春れ世

くくし海と并をらしとて秀句まきまわりるさーしそ
約めま左下句よ流しきにや侍ら衆心表句くーうりて勝

侍らハされ道えくくーもや飛躍侍心尤勝よ侍へし
白妻

左 拍

通宗朝臣

あつあぬしきうなり乃まのぬけはたぬく歌よきふもくじつ
心 心

隆信朝臣

いつくく物のひふせー春好とすと運はむま中とほじけり
心あー心たさとありり初のみと并れとりん此聖極

小こく事一けりあそ
尤方一云云野遊よ似たりと心と心さーのゆのさあ片

里を日奴久し二番れ尤方難多へんんきも同あれ
右あー心此表そ又とと連うりを春海即くや

判云心の侍りひ尤心の方人一う皆お尚れ拍とをへし
又番

左 勝

女房

右 勝

信之

るまで左きくをれ登と紙為まはすをれくつ乃紫下くさ
たあや一云左新一歸一を珍く事一あこりくや又も
海とふらんも詞のたつぬやうにまこぬ

左方尸ま左新一初バ又字母よのまきくをのややもつく
判云左たれ方心詞あくも尋不取凡新一乃ましくこと
とくつ魚りみを理とりひとちされとも軽とする紫約もや
あまき一の春下やふせりひるまであまきくをれやとく
ゆるん歌なりあしうもやしゆるんさくし右の末れ句の
紫の下くを殊あのみり一をみし侍可る勝

八巻

左 勝

紫經つ

みりるすう人や字はすまれ登よらとやうさくを登りまれや

右

經家つ

きくすひくゆこが原乃馬立くをぬこしにるもの者まへり
右あや一云左別歌之由

左方尸一云きくをひくを立をを所くつ子く物馬立を馬
乃左りりをれをら雑也

左陳云山雪をたう原とのとりひくも回事もやをとく
里不異山新一歌もや

判云左すまはくうり下もぬお風を上の二句まをまの新
りり一首不ね登り一やをまくす名を病くとれり澄り

ひくおのま又りともまや下ひの家り不謂りりまら為也
まの里とりんせ上右中右不去病老常乃事りり撰集と

身命又... 不可成業といへ
や海ひるれ... 勝とて人たれ

九番

左 勝

龜宗朝臣

春山の霞れうらうらなくきこも思ふ心さうそく志連とや

右

隱信朝臣

思あまると人... 志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

左... 志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

右... 志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

不可成業心

判云左新... 志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

ふと下... 志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

ゆり... 志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

詞... 志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

句... 志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

十番

左 勝

龜宗朝臣

志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

右

龜宗朝臣

志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

志連はく習きくをそれ妻志のほこをいふら

判云左云乃を望處て勝負不ふの持なりや

十一番

左

女房

ひさし野小きくをを喜やあもれらんあの子りれ下に唱也
中宮控大夫

右 勝

つ下意のきくを唱なり物子をもあまはやくてま即くれはく
左方より之れ政方よ處てや煙とみしんむき一燈よ津戸も
あもれるまを唱なりとりんれ舞小似らる

左陳云不入撰業者不及思多何難非

左方より云處てあまは必をまよ即く取く帯りまよや

判云左舞一於政舞一之条ハ不可避敢事一也撰業かを強て

ひさ出まへりてをよしくし今日とこせり煙行事非也

舞物子も鳴連はやく不及執元たまさる侍さん

十二番

左

歌昭

つ下しひの矢をきれきくをひきよあふすそ野も人あされや

右

舞蓮

持人のへ野乃きくを津戸こひてなく舞計よ身をやり色てん

右あより云處てあまはきくをまよひあされたり

左方より云舞一不耳心

判云右唱考まうりまふとりんれなく計よやまへる持人のり

ゆれを犬のひ邊とあてむの舞世なり物とくし

左も交れあふとこくむ人のあされもつとれり

さくら物りふもへ野乃きくすつとまをんまて勝負るめ

右

経家つ

みりこどもやあせれまき袖おたり花立ひも里祿床あこめよ
た尸云床とま雀乃と偽ひも里乃床せうりしとけりたれ
た尸云焼せれまきと偽ひも里乃とよハまれの袖れあ
もようま

とよ人

十六番

た勝

女扇

ひも里の霞も少り花まくれりお日約まのひも里なくる
右

あそみれあめりれひとりも今そとてあさらりあろ又あめり

た右もにせり

判之あ方あれた夕乃ひも里しとて海を回極よみし偽連
右殊よひりそま極ふさあそ偽りそりく又たる勝

十七番

孝澄つ

もあしくや萩の焼原立ひも里霞のうりりしとあめりれり

右

信彦

春ゆのあそりれり下ゆし少りまそあめりれゆひも里

たあ尸云花新し極事

たあ尸云子も下ゆもすばれま又り極少りまそあめり

ま

右陳云とくつ岐のゆらやりのなるたるとつらき建てあの形様も
芝ろあひまひり

判云た舞の霞の肉より舞あり此ひつやれりくよう作建

右れ舞のさつり建てあり此ひきすありつふろや建と

野道乃のすまの下風ふなとりん此ゆるく吹らんと景氣

きてしうみしゆさ心たふひのれく膝履舞并れ

十八番

十十友

歌詠

ふ世もさを小りともくあられらめき権の床を蒸や志わん

勝

舞

子と思ふをさらの小燈を物めありともやうさひとてあや

たあーまよ又字わー又字たにすふく

右方尸を子と思ふをさりとつ小燈をさたの事やらん

とさく也又をさりとあの形とをむろや後ひの

判云たの初又字はこによろうされりて入てをき権

乃子網を乃りむらむをさるあのをさ床との

すらもをあらけへしむい成われも志もふなとれ子と

うもをきてうかをあらめ春れ目うららのるれをま

花上てさくくくく又たうてれかおとすの物う

得やあれも床とのふとや志ゆんともいふ包う

され事一なりへし右きき権の志をもかかひ舞も舞

り記てその物と初のみ字をれ建てを上ちうそへはたの

ともをさされまやをたらあの形も同じくをゆるし

くくくく右又字をす不快を権のむも不可辨みしゆ

病氣と苦しむるに可勝しやゆらん
十九番 越線

左 持

孝経つ

此の國にあらはれし御もそあそふつとありへひはかきなり
左 持 隠信の長

春くれをまひく柳のともむりふたふゆりふや捨ふりやゆめ
左 持 心記つくとすゆ

左 持 判まじま首のけうひをたれふ人
左 持 左 勝

廿番 左 勝 左 勝

花月つふれなつらりなり交申人の形場小人乃なりめ且くと
右 左 勝

あふひのや霞の衣さつららん春はををうあそふいとゆふ
左 持 左 勝

左 持 判まじま首のけうひをたれふ人
左 持 左 勝

らんをそそまかなひても子あしこはよや花月つとゆふ
左 持 左 勝

くわりにふふし左まれ句きすあすまゆつとゆふ
左 持 左 勝

廿一番 左 持 左 勝

左 持 左 勝

つりとなく思ひみかへんて色取よみ山一多ハあそぶ糸ゆふ

ヤ一七

信三

空ふ志連春の影をいほほいとのお思ふをちるま方打新志と

尤心せよといに五十一号

判云ぬ方乃遊縁を述懐うしよをて舞うとぬよろしく得よ

や指とよとくや

廿二番

左 勝

五家朝臣

春くぬをいみこ取くつとゆふと一をちりやそありと新まん

右

舞蓮

まのせのち果う吹もき物乃故もゆふのふあそぬいやゆふ

尤心せ不取

判云二首は風評優まをゆと尤ををうしみこあくといへ

右をき物の故もゆふのふあそふといなる柳北あこ

もうつとにあそふん事つと尤乃勝なるるくや

廿三番

左 勝

女房

ぬれうし千里とけけて見する耳も心の芝よあそふいゆとゆふ

右

中宮権大夫

むけこそとあ家うけさうふ乱れくひあそくもあそふ糸ゆふ

右あしー云を指靴

尤方しー云ひ不ろくも法句うし不叶九

判云右舞乃下句たあ乃し与可法也と書しゆ也尤舞

束句なく殊うしよろしをみしゆり勝とまへし

廿四番

左 勝

定家朝臣

くらや春の糸ゆふくよるをねるみとられをよみぬは

右

家隆

長閑なり夕日のそとすのこぼれはうとぬふるむろいとゆふ

たふ不執ヤ

判云たくり也しゆくよるをなとりんれいと事ふりく

まらやうゆそゆ連と回とりのかといへば末句を優よ

ゆよや右き夕日のそとすのこぼれはうとぬふるむろいとゆふ

れりさびしきゆと考その前あすありてよみしゆ

まはみとりのそと勝とやゆへりらん

廿六番

春暎

左 指

孝澄

まわらふ霞もくらくとを列のありそとともみしむのくれなりを

右

経家

霞もやゆりそとと押しむら舞むりそあうまわらふふれ

た方尸云の考ゆゆりのよりそすありあうまやうに覚ゆ

たあやうま心かうあふれおれさう

判云あ方ヤうとお尚まりの言なりし

廿六番

左

家昭

けよあしむとめや思ひまふむりののそとぬ春乃のけりの

右 勝

隆信朝臣

はたとなりくむさむらひとりねは明りのつらとて家の名取

心ありて春暎と深くいささかの移りなく物類も暎とりて
あり思ふ小色くや

九右一云無指難

判云右并一丸の人懐念之田成中一可不法気結を
ふ海を以文字あへてまるとしそ尸事なれいそんや
暎はとありそれりしりしるりて子細と云うとれ
不似と云ふ事や身はれ并てらふふ乃ここと海しこれ
不足りし空をゆる右とようまされと一ゆるめ

廿七番

右 指

道宗御旨

暎やうの心の家人のるるむへき難はつてこの春はぬかの

右

中宮権大夫

お花あをゆりゆまにそんてたりたはは乃文のまれのり

思た心せ無殊や一与

判云あ首の暎はぬわつてたつ此の文をう一優乃ふともや
勝負秘分可る指れ

廿八番

右 丸

定家朝臣

霞うし花うくひをみとらう暎を春よあもまらるる花あけりの
右 勝

家隆

のすをうみす之れ松山のくと波うしをれあく暎を乃そ
右方一云丸并一とみ難

丸一云右并一耳心

判云丸を霞うしとをけり霞のうしをなとりのふへみ心よ

花雪くしとらられて音れのけりのなまじり人れを幾城樓
關馬花裏と云詩の心と覺てよろしくもゆへし大新しそ
末の松山よ思ひひらけおとれおとれおとれおとれおとれ
あしはくしくしくゆめりゆめり霞ととけりそ霞は
おとれおとれおとれおとれおとれおとれおとれおとれ
うへおとれおとれおとれおとれおとれおとれおとれおとれ
廿九番

右 持

女房

みぬ世よをわりのひ乃こそぬ祿よりきりうすむ春は明りの
思出をわりのひ乃のめりうすまをひりのこきまれのめり
おとれおとれおとれおとれおとれおとれおとれおとれ

心

信

春判云ぬ春曉花をきりうすむとつひ心をひよのゆきと
りん心家たつとれりうすま指よゆへし
廿番

右 指

五家朝臣

あやのけり秋あもまさおをきり月けりうすむまのめり

右

舞

今をとれたのむの節もうち倦ぬお月夜月歌乃ゆなくそ
おとれおとれおとれおとれおとれおとれおとれおとれ

右方ヤ一云心舞殊耳心

判云た乃月けりうすむまのめりおとれおとれおとれおとれ
乃をた小優美ゆへて又まおとれおとれおとれおとれ

一番

逢日

一番 虎 持

歌 昭

うらひをの百さまつり成りて敗るるのたまひお唱まじらん

右

信 彦

志の上り初めと改葬をとつれてあを連りつけさ春れをうれ

虎もこもり不取

判云両首の運世虎馬乃百鶴里右鶴のり改葬せよめりなる

いよありを穿しゆり姑とまへし

二番

左 勝

孝 澄

玉の目わたのむら中小ありし孫も孝しといけり小袖ゆそまを

右

經 家

春の日にたふれあふこころれく小昔夜きふもひる柳つらん

左 右世世念乃り

判云右新ひる孫とたひくおさしなりん事下り

懈怠もやゆへりうん虎新りそま下り日ゆらふふと優

しそゆめれ心虎可る勝

三番

左

五 家 朝 臣

夕暮し思へし今初のあきそと夜ををりてさむらうすん

右 勝

澄 信 朝 臣

ついで所くはも建は婿は春れ日成乃りけし袖をきた思らん

虎もこもり不取

判云虎怒のあくろといけりくまをせりしとまをゆめ連

右 辨も建は物さなとりん恥心ましくもろしあふ似る

勝り得し
白藜

左勝 定家朝臣

けりめわひぬ芝のころに霞日ふれさく山を西を馬の跡と
志

中二宮権大夫

つれくせくろくろくろのぬれ山里れ荒れぬまのまを乃心を
たふとも小回お之由や之

判云花らく山をりてわのねとくいへれ末句ハ優り得

魚一志そくくしうのぬら山里乃れとよろしくしう得と
荒らぬまといへ海やむ月の末さあきあきめけあ

よやゆららるる

又番

左勝 女扇

秋月八月得しこのうらまは揚りてとて家乃や海

志 孫蓮

あつ雲のやへ山乃荒れをみせ海の家踏を日そを海のりり

右あや一云右舞一殊不歌一

左方甲一云右言日そを取のるつらん

判云左舞一揚りてとてさなとり人取下句れりてをさあて

ゆり勝ととくし

六番

左持 道宗朝臣

をのり雲をぬけてや人そくとしらん山は海ゆら春れを

右 家隆

春の目をけりて此温風のあけ人もりやと海までやくじのぬらん
右右のあけかろくされり一歌

判云函首其下不遇之由方人の人々下を指おしう傳りぬ

七番 志賀山越

左 勝 定家朝臣

神の言を吹り發ちりて山を越えりてなるる此や海まで

右 家隆

あけけりて花の掃りて池みしてまをすあゆく志の乃山あし

右方一云た新句なり此のそく此字耳なり互てさる也

左方一云た新句無難一と

判云左新句右の亦人耳なり互なり一云とくしは志賀

山越されりろくやあんとやを傳るもや志新句花乃

ことをろくやとみしてとりん歌らりけまるむよやと

心すくなくやゆるん花乃あくるや

八番

下巻た

五家朝臣

花らまはるやとよあぬ志賀の山を越てこすをを越け春の發

心 勝 源家朝

あうもれて志のの山を越れもらり新たうとるを成り

左方一云よけぬまふく

右方一云た新句

判云左新句よあぬうしてなりこの詞を産米をく造らたよ

心 右為勝

九番

十番 左 右

道宗朝臣

ちりほりぬれぬとぬまーと思ふまふ道とふふれ志のれ山越

右

隆信朝臣

春ささく雲流を分れひらしてをれこそみし孫志の乃山あし

右 左 勝 思ふまふ不快元

九方尸之右文苑小八五て是うみし孫といるる狂流元

判云右文苑の志よ似くく由乃いれこて詔書しるる殿了

十番 九の思ふまふ志本人中伏願可流元指ととへまよや

十番

八番 左

孝經つ

ふふふの思ふまふとくをさ思ひまー花をぬりふ志のれ山みり

右 勝

信定

道もまふ花の白雪ありとらて冬あそり人れ志のれやふあそ

右 左 勝 志のれやふあそ

九方尸之志本舞歌

判云志本舞歌山越を志念すりおりのひて山をとり人れ

志のれやふあそまじりおりのひて山をとり人れ

あそまじりおりのひて山をとり人れ

十一番

左 勝

歌昭

ひりーとれ志の山流をゆきうめて人乃心とをれよんすは

右

舞臺

志のれやふあそ人乃家つとをれよんすは

志のれやふあそ人乃家つとをれよんすは

九方右衛門ノ至極之由

判云右衛門下向を荒賊とありふ思ひたる人もありともや
ゆるん志すれ思ふ人あ家家はとも荒もさゆのみわれ
ゆの折ゆるふやゆるんせう下向お應して是ゆるれを
ひのこしよやゆるんこししなど家はともりを考らん
たしいるる家たさまさこゆるん

十二番

左 持

女房

とらゆこやまこみの孝を慮しては荒れりふ志のや極うし
右 中宮権大夫

春ありと荒のゆるるう一なりぬまはくもと入志のれ山越
たふ荒衆一慮していさくあり再う一とらう一

十九方右衛門ゆらめり一又田と一又うこへ一人あり

判云右衛門とそあまを母よまるくやまこし山越乃道れ
荒ともしときて他のみ秘のうまうのうらと思へれあは
乃心よやゆるん右うら思を懐り一ようゆるんを宣之由
一之上荒も多所詔之由ゆの極乃心よのうの誓のゆるや
尚町不覚快よりて勝負多記して

十三番

三月三日

左 持

歌昭

ゆのゆきの後よはきて唐人の小ふれりまけりきふと一う思

十四番

中宮権大夫

ゆ水にうりふれ荒のゆのゆきやゆの連くのむのたぬるん
たふ世無可極之由一

判云左方を漢家住事と思ひ右方を我々のため一なりん
事一七の一人を風折又各殊を歌可る指
十四番

左の勝

定家朝臣

唐人の邊をばふれ所の所をこれ故に云ふ今日をききしり

右

家隆

う人をききし川の心を挑り花三月のききみるをりり

左方一与同前

判云左も右も曲水八選案と思へるなりし右を左川の心

と三月のなふる魚ととらんれつとを思ひぬゆる縁と

定凡事なりしや左勝しやゆるん

十八番

左

五家朝臣

そふとつて思ふふらとむ益とまぬをまそ花よ思ふらん

右勝

孫蓮

花の久をへ日とのあす本れりて春も昔り三日月乃り

左方同前

判云両首又同前之由人一と云ふし左を右醉干花

桃李之盤也とらんれいりてし右春も昔り三日月の

新しうしとゆるや左勝とみしゆり

十六番

左持

孝経の

竹の建ふて思ふとくくは益をさして後よとみしとをきり

右

孫家

いし海見けむのきもやうぬ盃をひさせらむのひなるまらふと

右又同前

判云左心乃思ふれさうのけさうして澄おこりひいひさせらむ

下なくいるる心詞をさうしこみ回前なるへしおこさ入し

十七番

左勝

女扇

お莞とさふのまとのれきまてさうさめくれまらうのけさ

七

隠信朝臣

思海よりお建そくことあつはさおぬれ又あへうつふ今日

右方ヤ一云左舞一よろ一きれ似たるの

たのり一云左舞一よろ建さうひくこといへあけあを

すや迷もや

判云しゆうひは小優う一うみしゆ建たあ甘の建てく

ともりのあまひさのやをゆへみさく一左八はあう

めくは春北あつはさ珠およろ一皇子あをゆる仍為勝

十八番

左勝

道宗お長

桃の花枝さうしををたれを波おまのをんきふ乃あつはさ

右

信定

あつはさのあうれとせにむふり一今日れは吹まのやあつは

たあつはさのあうれとせにむふり一今日れは吹まのやあつは

左方ヤ一云左吹耳一立

判云右そ花ゆくたあ耳よ一しと云くあ建曉風緩吹不云之

いえ突といふむはむやゆるえたもた無難と云と勝

引ののりる處の末れ意小田うー蟻もさ家のくれうーむるわ

右

強敵

みくれて井くみの町をつもまゝもせ波乃よまそ群をさくらぬれ

た方一之元身一子と末如行

右の火さ心寄ゆらま物り

判云霞の末れあう小田をまをうーさひてうーをみし得連

つくみゆくまて井てのうーつをまめくばくをさうひて

得連とあてて覚ゆるを波乃よふとや井てのりもつ中も

るてゆるん元勝ゆるん

廿二番

左

強昭

山吹の小ぢお井てとさうそけりてうひやりの下まうさう

右勝

信定

まことうぬま苗の象来るひくやりを多く蟻乃群れひくまに

たあやまうひやりの下春よまれさう事いのかさ遠うひ

やりの下うー写うもつとらふおを第集集川杖記ふさう

へされお霞ととりつさまにのふらひ杖渡渡る事集集

あもたゆくみぬれり

陳云りさう乃魁少くま撰集あも奇合中も遊世もこれ春の

題うー詠するやうひやりの下うーなくかまつとよめらに

所あてりさう乃魁ふかひやよまん竹のま歌歌へ

又強云りもつとらふよまんるをいさは不及たうひやと

まよまんるの城さうひや

又陳云りひ屋をいふと極るの依ありを肉うーのわいお

こころをさしひやせりふを下小蛇子とくもためよ
あやしくあひまう也と民もさとりひやとひふりあはし
その依不可遂

右又歌云のさびしハ子成りふ事を四月より乃し也
あつしは春あし不露事也

又陳云のひやをほくこつれもさそとささう相ひぬ
春も最を蛙を此下ふるまてん子とりふ事又三月中
すりひりぬ若不可を透凡

危方一云心新一を殊絶

判云危新一のひやり下小蛇唱事さうらぬりせし事
ひをり下りとりんれをの字のめはさしく子とあ
又のひやも春よめらんやなとせらとふおのけりけ

取所くろしはたたりの言此状さう已勿論の事とみし
ゆきえのひやの下此新一を可乗業一二首みもゆらと
下を指南とをさへふ事一ゆきを一首をお慮りひやの
下一ひやくりもつあふさうのハ口連らひんやをさ連才
十巻秋之内也今一首をお慮りひやの下一唱煙也所く
ありとゆらんあもの同才十巻之内也こ連ら此新一乃
心そ山両書一四と守子為代位を離る一て山中に
念若之回煙の群とすて別若のなくあめとをれむおすれ
新するも又のひやといふを皮膚力とさう一火とくゆ
り一煙とあやりしつて或を今拂農蚊若を今去撥雄廉
也於於蚊廉若孤雌一句も依むて煙矣若可る一受矣而を
右之筆出異説云川のものとみり末とへ浸し七ゆ一は若

と稱す定事一也を上のをとりてへさるる飼養と云ふつ
や言は尚譚説也而今の回音もを春時兩舎す一蚕とりふ
をとかひの屋と稱ををふる一蝶の月をり来て蚕を食りり
と云ふは彼已不足云は蚕養の趣と蚕室とをさしゆる別
儀物也此書てゆる物中も玉もさるるの事一とリ人既不
小蚕初子目玉もくもを以て蚕室をうまはくひ祝うむる
まるといなる凡蚕養之法正月初子日子午歳せせは女子
をうひ女も稱して蚕室とりまらうひ祝をむらうと次二
月午日初て蚕乃殖とせして暖日る一あさりのつて三月
午日初て桑す一は當て四月と戸ゆとひくと死る一はと
と云ふ如は古民亦黄主之蚕室の内り一何ぞを用之蝶を
令聚へて可令施子蚕室况蚕書れ室中令不可極潺湲又よ

不可湛泥沼河津何因可令寄復子凡蠶墓を中自意不水色
小寄復する物也然若晋惠帝墓とすとも花林園とリ人れ
橋清なり蝶と御せしと并ての中成させり漢家平物蠶墓
之唱不皆田園水津也若は第集方々山中乃田川廬虫火
庭りト煙唱事む相面事也物室といるるを焚煙之洞漆よ
聳まらる物處の山勝よめくれ既不寒よりてはさしむ相叶
若也若人蚕養是時之糸を不可軽し凡只子飼を可取
尸帯也危方尸各何去民境はまむ可憐也之彼也右方子苗
の糸束はひくく心よろしく寄をゆる可る勝也

廿三番

女 勝

女 房

致そくを此のうゝ草風あきて波や音とる一のしひなるる

右

深蓮

庭の南をりし山よりあらしさきとあけうけと煙りくる

右心はま指ぬ乃よりと

判云あ首風折せたりしやみしゆ小らりて花乃枝と

とふ望いへ流珠よりしきも花の勝はゆし

廿四番

右 待

道宗卿長

と流も小しきあつらさきさうさぬの流乃煙りりせ

右

隆信朝臣

うとせりし波の下よりなぐりしつらにゆへは根なりらん

たふたのくは異事のよりと

判云た右れ煙りきぬ乃地ありき根はくいへれ心討れり

さぬまみしゆりおととくや

廿八番

秋春

右 指

弘昭

さのびやの玉露のらしとて春とあはる氣あする

右

中宮権大夫

あのをろと花のうとみ春も今つくくハあはとすは

たあし云花舞しむとて花は似ると

花方中石舞し下句よとくや

判云花方し右方乃下句流よりふらうゆめ連世の月まを

せつし今つくくはとらん花あはるもさうれりくし

又勝負不分別

廿六番

廿六 左 勝

道宗朝臣

莞のこゝれあめり春そうくひま乃鳴きうらまにとまゐる成なり

右

経家つ

うらひを思ひひまの夢をなまけひまのうらまをなまを服て
右のうらまを舞へりあつとさうなりぬるらなれの舞へり後

あわれぬるくや

丸方へ云云舞へり舞振事之由と

判云た舞へり初めこしに心方如く伏れりといふは云ふ成ぬ

るやうに思ひしゆ建て来り優小ゆりや心春を服てといひ

とそさうにたの初れを云ふれりりりくゆみさう

廿七番

左

季建つ

こひて思ふこひつとりの歌へる名流其のまぬ花もねよぬま

右 勝

澄信朝臣

わの嬉ふびきにそくておりふり花とそくはく春れあくは

右方へ云云舞へりあつ建ぬ詞再り

左方へ云云舞へりわの舞へりびつとさう

判云たれまの舞へりびつとさうのあつ建ぬをなまを舞へり

をやゆらん

廿八番

右 持

芝家朝臣

木のりこそひのうささうらまを思ひしゆたのころらぬ春れあつ

右

舞蓮

号れまれの舞へりさめ建てさうらまを思ひしゆ今也思ひしゆらん

110X
355
8